

注意集中能力が言語・認知神経心理学的諸能力の発達に及ぼす影響

谷本 茉莉

<目的>

言語聴覚学の立場からの注意欠陥多動性障害（以下ADHD）に関する研究は、皆無である。本研究ではADHD児の言語・認知神経心理学的諸能力（以下言語・認知諸能力）の発達を長期間にわたって追跡調査し、言語治療の立場から以下の研究課題について検討・考察する。

- 1) 早期言語訓練効果を、3歳代訓練開始のA群と5歳代以降訓練開始のB群で比較
- 2) 注意集中能力および言語・認知諸能力との関係を投薬治療の有無別に7例から抽出した3例で比較

<症例>

藤本耳鼻咽喉科クリニック（岡山市，以下Fクリニック）で、言語訓練を実施したADHD児7例（全例男児）を研究対象とした。

ADHD児7例は、3歳代訓練開始のA群（3例）と5歳以後に訓練開始のB群（4例）に分けた。また、7例の中から投薬治療を行った2例と、比較対照例として投薬治療を行わなかった1例の3例を抽出した。

<研究の方法>

Fクリニックでは、4名の言語聴覚士（以下ST）がADHD児7例に平均5年1ヵ月間、訓練・指導を行いながら定期的に言語・認知諸能力を評価するための諸検査を実施し、それらの結果は診療録に記載されている。著者は、その診療録から各症例の1996年4月から2007年9月末までの諸検査結果を抽出し、以下の項目についてまとめた。

- 1) 知能（WISC-R・Ⅲ）を動作性知能（以下PIQ）・言語性知能（以下VIQ）で、聴覚的語彙理解能力（絵画語い発達検査）を語彙年齢で、読書能力（幼児・児童用、BⅠ型・C型）を幼児・児童用は段階点、BⅠ型・C型は読書年齢（以下

RA）、構音能力（日本音声言語医学会版構音検査）は単音節と単語の正答率で、A・B群の年齢別に比較した。

- 2) 全般的知能（田中ビネー式知能検査）、WISC-R・ⅢのPIQ・VIQ、読書力検査BⅠ型・C型のRAは、3例でどのように変化したかを年齢別に比較した。構音能力は、健常児のデータと年齢別に比較した。

<結果>

- 1) 7例（A群とB群）の結果

3歳代訓練開始のA群は5歳代以降訓練開始のB群に比べて、PIQ・VIQ、語彙能力、読書能力、構音能力が良好であった。

- 2) 3例の結果

投薬治療を行った2例（X，Y）では、投薬治療を行わなかった1例（Z）と比べて、言語・認知諸能力が良好であった。

全般的知能とPIQは、ADHDの症状の軽減とともに伸びたが、VIQは伸び悩んだ。読書能力は3例とも遅滞し、ADHDの症状が軽減されても、遅滞は改善されなかった。構音能力は健聴児と比較して、1～3年遅滞した。

<考察と結語>

ADHDの症状が軽減することと比例して、全般的知能、PIQ・VIQは正常となったが、読書能力は遅滞した。注意集中能力と言語・認知諸能力の発達には強い関係があり、ADHD児で見られた全般的知能、VIQ（左脳の機能を評価）、読書能力、構音能力の遅滞は、左前頭葉の機能障害によって生じたものと推測された。今までADHD児は言語訓練の対象外とされてきたが、ADHD児も言語訓練の対象となり、早期からSTが介入することは意義があると考えられた。また、早期から訓練を開始しても、ADHDが重度で遅滞が残存する場合には、医師と連携して投薬治療を行い、ADHDの症状を軽減しながら就学前訓練を実施することが効果的であった。

<主な文献>

相原正男：認知神経科学よりみた心の発達と前頭葉機能—発達障害を通して心を考える—。小児科47：335—345，2006。